

教養教育等本学全体の授業内容・方法等の研究開発

— 教育システム研究開発センタープロジェクト報告 —

橋 本 功

1. プロジェクトの目的

本プロジェクトは、『21世紀の大学像と今後の改革方策について—競争的環境の中で個性が輝く大学—』（大学審議会答申，平成10年10月26日，『21世紀の大学像』）にある以下の項目を本学で実施するための方策を研究・考案し，本学の教育の活性化に寄与することを目的とする。

- 1) 教養教育の重視，教養教育と専門教育の有機的連携の確保（『21世紀の大学像』，第2章1. (1)1)①)
- 2) 学部教育と高等学校教育との関係（『21世紀の大学像』，第2章1. (1)1)③)
- 3) 教員の教育内容・授業方法の改善（『21世紀の大学像』，第2章1. (1)2)④)
- 4) 国際舞台で活躍できる能力の育成，特に，外国語を聞く力，話す力の向上（『21世紀の大学像』第2章1. (1)1)④ウ)

プロジェクトの内容は多岐にわたるため，複数のチームを編成し，実現可能な具体的な方策の研究および開発を行うこととした。全体の責任者は橋本功であるが，個々のチームの責任者は以下である。

- 1) 教養教育とその実施方法 研究責任者：進藤政臣 保健管理センター教授
- 2) 教官相互の授業評価 研究責任者：守一雄 教育学部教授
- 3) 視聴覚機器を活用した授業方法 研究責任者：菊池聡 人文学部助教授
- 4) 信大型外国語（英語）教育のシステム研究・開発
 - (1) 高校と大学の連携による英語教育のシステムとカリキュラムの研究・開発チーム
 研究責任者：橋本功 教育システム研究開発センター教授
 研究協力者：宮崎清孝 長野県長野西高等学校教諭
 下井一志 長野県諏訪清陵宇高等学校教諭
 藤沢衛 長野県飯山北高等学校教諭
 - (2) 日本人の英語による英語教育法の研究・開発チーム
 研究責任者：井上逸兵 人文学部助教授
 - (3) 教材研究・開発チーム
 研究責任者：David Ruzicka 教育システム研究開発センター
 外国人教師

2. プロジェクトの特色

- 1) 教養教育とその実施方法

本学は，「4年または6年一貫教育」を掲げているにも拘わらず，ヘルス教育を含めた教養教育は低年次生に限定され，専門教育と教養教育の有機的連携が阻まれているのが現

状である。この現状を打破し、より良き教育環境を学生に提供するためには、各学部の専門教育と平行して、多様で、かつ、4年または6年間継続した教養教育を実施する必要があると思われる。これらは教官が学部間を異動することによって、あるいは、学部間の壁を低くすることによって、問題の多くは解消可能であろう。しかし、専門教育を中心に据えている教官の意識改革にはなお時間を要するように思われる。従って、教官の移動を最小限にして最大の教育効果をあげるためのストラテジーを考案する必要がある。

2) 教官相互の授業評価

授業方法の改善には教師と学生の両サイドからの授業評価が望ましいが、本学では教師の側からの授業評価は実施されていない。本研究課題では教師相互間の授業評価のあり方等を研究する。

3) 視聴覚機器を活用した授業方法

学生は、豊かなメディア環境の中で育ってきたために、一方向の講義形式では効果的な授業運営が困難な状況である。教室における学生の学習意欲を高め、理解を促進する手段の一つとして、プレゼンテーション・ソフトウェアを活用し、テキスト、映像、音声など様々な情報を統合的に扱って授業を展開する方法を研究し、誰もが利用できる方法を開発する。

4) 信大型外国語（英語）教育のシステム研究・開発

(1) 高校と大学の連携による英語教育のシステムとカリキュラムの研究・開発

高等学校と大学の英語教育の連携を密にし、高等学校における英語教育との連続性を保ちながら、本学学生の英語能力の向上を図る方策を開発する。調査方法は、平成12年度と平成13年度の2カ年にわたり以下の2種類の調査を実施し、それに基づいて本学の英語教育に対する改善策を開発する。

- ① 本年度12月に県下の4つの高等学校（屋代高校、飯山北高校、長野西高校、諏訪清陵高校）の高校生と本学1年生にそれぞれ約300名ずつに同一のテストを実施し、本学学生の「英語聞き取り能力」「英語表現能力」「英語語彙能力」を把握する。ここから得られるデータによって本学における現在の英語教育システムの実態と有効性を明らかにする。
- ② 信州大学に入学を希望する約80名の高校生に本年12月に TOEIC を受験させ、さらに、入学1年後にこれらの学生に再び TOEIC を受験させる。これによって、本学における英語教育と本学学生の英語能力の変化の相関関係を明らかにする。このデータから本学における英語教育のシステムとカリキュラムの改善策を開発する。
- ③ TOEIC を受験したが、他大学に入学した学生については、可能な限り1年後に TOEIC を受験していただく。これによって、被験者の英語能力の変化をベースにして、他大学の英語教育と本学の英語教育のシステムの比較を行い、本学の英語教育システムの改善に活用する。

(2) 日本人の英語による英語教育法の研究・開発

シンガポールとマレーシアは多民族・多言語国家であるが、非母語である英語を共通語とし、教育のための言語として用いている。これらの国では欧米で開発された英語教育法に依存せず、それぞれの国が独自に開発したアジアに根ざした英語教育法を用いて

成功している。これら諸国の英語教育を参考にしながら、信大独自の英語教育システムの研究・開発を行う。

(3) 英語テキストの研究開発

テキスト会社は多くの英語のテキストを出版している。しかし、それらはいわゆる商業ベースに立脚した個性に欠けるものが多い。本プロジェクトでは信州大学の教育環境に適した英語の教科書を開発する。

以下は、これらの研究成果の中間発表である。